

「現代社会の危機と共生社会創出に向けた研究」部門
／シニア社会学会「災害と地域社会」研究会 共催イベント
(わたしたちはフクシマを忘れない 第5回シンポジウム記録)
あれから8年—<二点居住>という生活のかたち

■趣旨

東日本大震災発生から7年半が経過しました。原発事故被災地では帰還政策によって避難指示が解除され、ふるさとに帰ることが可能になった地域が増えています。そして、ふるさとに帰還して生活を再建した人もいますが、これまでの長い避難生活を経て、ふるさとに戻るのではなく、避難先など新しい地域に生活拠点を置き続ける人もいます。「居住地の選択」という観点からみれば、それらの生活は「ふるさとへの帰還」と「新たな地域への移住」とに分けられるかもしれません、多くの避難（経験）者は、「避難先」や「避難元」、そして「かつての避難先」など、二点以上の地域と関わりながら、引き裂かれつつも、広域に分散した拠点をつなぎながら避難後の生活を組み立てているのが実態です。

今回のシンポジウムでは、原発事故被災者の「二点居住」に着目し、まず複数の地域と関わる現在の生活実態を学び、その苦悩や困難を共有し、複数の地域と関わる生活のあり方、社会のあり方を考える機会としたいと思います。当日は、東京都および福島県いわき市に生活拠点を持ちながら、避難指示解除後のふるさとにも通い、複数の地域と関わっている3名をお迎えします。今回は座談会のかたちで、それぞれの現在の生活を選択するに至った背景やそこで直面した課題、現在の生活のあり方について、住民の視点からお話をいただきます。

(川副早央里)

【シンポジウムの概要】

■日時

2018年12月8日 14:00～17:00

■場所

早稲田大学戸山キャンパス36号館382教室

■共催・後援

共催：早稲田大学総合人文科学研究センター＜現代社会における危機と共生社会創出に向けた研究＞部門・一般社団法人シニア社会学会「災害と地域社会」研究会

後援：早稲田大学地域社会と危機管理研究所

◆司会・進行

長田 攻一：シニア社会学会理事、「災害と地域社会」研究会座長

川副 早央里：東洋大学社会学部社会学科助教、早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員

松村 治：新宿NPOネットワーク協議会理事、早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員

◆映画上映「ひとと原発」 監督 板倉真琴

板倉 真琴（いたくら まこと）

1960年東京生まれ。映画監督。三十歳を過ぎて、脚本家となり、やくざ映画を中心にヒューマンドラマ、アニメ、ゲームなど、恋愛もの以外をこなす便利屋ライターとして脚本を執筆。岩手県の山奥で一冊のノートをとおして心の交流をしている実話をもとに制作した『待合室』で映画監督としてデビュー。以後、自らカメラを回してドキュメンタリーにも挑戦して現在に至る。

◆登壇者

大坊 雅一：

浪江町出身、東京都在住。浪江町ではうなぎ料理店を営んでいた。震災後、東雲住宅に避難をしてからは、東雲住宅の避難者のための自治会「東雲の会」の事務局長を務めている。2020年には浪江町に帰還して、うなぎ料理店を再開することを目指している。

二俣 公子：

富岡町出身、東京都在住。東雲住宅避難者自治会「東雲の会」役員。震災後は息子2人とともに東京に母子避難をしている。2018年冬は長男が大学受験、次男が高校受験。将来的には富岡町へ帰還することを検討している。

田中 美奈子：

富岡町出身、いわき市在住。震災後は富岡町から転々と避難をして千葉県に至り、その後いわき市に移ってから、いわき市の借り上げ住宅に住む富岡町民を対象とした「いわき市在住富岡町民自治会『すみれ会』」を立ち上げる。現在では富岡町内の飲食店で働きながら、NPO法人「富岡町3・11を語る会」のメンバーとして、震災の語り部活動に携わっている。

◆コメンテーター

伊藤 まり：

東京都日本橋生まれ。大学卒業後、福島に嫁ぎ、家業の鉄工所を手伝う傍ら、社会教育委員、商工会役員など浪江町と関わって30年以上となる。震災後は避難先として各地を転々とし、現在は横浜市在住。NPO法人「WE 21 ジャパン青葉」代表。

浦野 正樹：

早稲田大学教授、早稲田大学人文科学総合研究センター〈現代の危機と共生社会〉研究部門代表、早稲田大学地域社会と危機管理研究所代表

■挨拶■

長田 皆さん、こんにちは。時間になりましたので、始めさせていただきたいと思います。本日は第5回の『フクシマを忘れない』というシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。このシンポジウムは2015年から始めておりますけれども、1回でこれを終わらせるわけにもいかない。その後いろいろ変化もありまして、そのたびごとになんか事情が複雑になってきており、何か解決の方向に向かっているかと思えば、そうではなくてむしろ問題が深刻化してきている。そのような印象を、私どもは持っております。そのたびごとに、現在こうなっているという事情をわれわれ自身が認識する必要がある。そういう意味で、継続してやることに非常に意義があるというふうに考えまして、『あれから5年』から始まったのですけれども、同じタイトルで今回は『あれから8年』ということになります。

最初はシニア社会学会という学会で浪江町に訪問いたしました、そのことがきっかけになりました、第1回シンポジウムをやったのですけれども、その後、3回目からは、早稲田大学の総合人文科学研究センターの、現代社会における危機と共生社会創出に向けた研究とシニア社会学会の災害と地域社会研究会との共催ということで、進めさせていただいております。



後援が早稲田大学地域社会と危機管理研究所ということでございます。

最初にシニア社会学会の袖井孝子会長よりごあいさつをいただき、その後、映画の上映に入りたいと思います。よろしくお願ひいたします。

袖井 袖井でございます。本日はお忙しい中、多数お集まりいただき、ありがとうございました。今、長田先生から説明がありましたように、私どもは、一般社団法人シニア社会学会でございますが、早稲田大学と共にこのシンポジウムを続けてまいりました。私どもと浪江町とのかかわりっていうのは全く偶然だったんですが、私がかねてより親しくさせていただいていた早稲田大学工学部の佐藤滋先生と、昔からお仲間だったんですね。先生が、二本松とか浪江町とかあの辺りで、震災の以前からまちづくりにかかわっていらっしゃったんですね。佐藤先生が、浪江町がいかに美しい所か、素晴らしい所かって、本当に熱を込めてお話になつたんです。後に山を控え、前に海が開けて、これ風水にかなつた土地なんだそうですね。とっても素晴らしい夢のようないい所で、ぜひ行くようになって何度も言われていたんです。なかなか忙しくて行けなくって、そういううちにあの大地震がやってきて、そして原発事故っていうことになつたんですね。



やっぱり行きたいということで、初めて行ったのは、多分、次の年だったと思うんですが、シニア社会学会の仲間と浪江町を訪れますとして、そして『新町なみえ』っていうNPOの方にご案内していただいたんですが、ちょうど5月の連休明けぐらいで、もう素晴らしいですね。八重桜が咲いて、ツツジが咲いて、フジが咲いて、スイセンがあつて、もう本当に素晴らしい。でも『沈黙の春』っていうのはありますね、ベストセラーになった。あれと同じようですね。人の声もしない、鳥の声もしない、シーンとしているんです。でも本当に桃源郷のように美しい町でした。こんな所が、もう人が住めないようになつてしまつたって、本当に信じられない思いでしたね。そのときはまだほとんど復興してなかつたし、そのままだつて、まだうちはちゃんと建つていたんですが、それから2年ぐらいたつんですかね、またシニア社会学会の仲間と行きまして、そのときはもう家も崩れていて、イノシシが出て、町の中にイノシシのおうちがあつたり、おうちの中もちょっとのぞかしてもらいましたが、ネズミとかイノシシとかいろんな動物が入つた跡があつて、荒廃しておりました。本当に心痛む思いでございます。

フクシマのようなああいう事故、本当に原発は絶対安全っていわれたんですよね、でもああいう事故が起つてしまつた。もう二度とああいうことを起さないようにしようとか、脱原発でいこうって、皆そのときは誓つたはずなんですね。ところが、のど元過ぎればじゃないんですけども、もう日本では原発再稼働を始めておりまつし、あろうことか原発を海外に輸出しようとかいう動きもございます。トルコはうまくいかなかつたようですが、インドとかなんかに出すそうですね。なんかもう破廉恥というか恥ずかしいというか、そういう感じでございます。

浪江町、本当に美しい桃源郷のような町が、人が住めないような状況になつたっているのは本当に悲しいことですし、私どもは継続して、あれから何年っていうんで、ずっとこういうシンポジウムを続けていこうと思うんですが、やっぱり、もうあれが取り戻せないっていうのが本当に信じられない思いです。そして首都圏とかその他の所に避難していらっしゃる方、きょうも何人かの方に出ていただくんですが、そういう人たちにとつても、故郷が失われたっていうことは深い傷跡になつていると思いますし、これから先どうするのかっていうことを、皆さまいろいろ悩んでいらっしゃると思うんです。

きょうは浪江町の方々をインタビューした映画もこの後上映されますが、やっぱり本当に忘れない。私は風化っていう言葉、あまり好きではないんですが、でも日本はものすごくこのところ災害が多くて、東日本大震災の後でも、熊本地震があつて、今年は西日本大水害があつて、北海道の地震でプラッ

クアウトが起きて、あまりにも災害が多いために、なんかどんどん忘れていくんですね。でも本当に忘れてはいけないことですし、常に私たちは考えていかなくちゃいけない。そして原発って何なんだろうか、原発をやめさせるためにはどうしたらいいのかっていうことを、考え続けていかなければいけないと思います。そういう思いで、このシンポジウムを来年も再来年も続けていきたいと思いますので、皆さん、よろしくお願ひ申しあげます。私のごあいさつはこれで終わらせていただきます。

■映画上映■

長田 どうもありがとうございました。引き続きまして、板倉真琴監督が現在制作されている浪江町のドキュメンタリー映画を上映いたします。まだ完成に至っておりませんけれども、今日のために、これまでお撮りになられた映像を編集されて、今日お見せいただくことになっております。板倉さんは脚本のお仕事を本来長くされておられるようですが、2006年ですか、『待合室』という映画を、これ劇映画ですけれども、富司純子さん、それから寺島しのぶさんのお二人共演されている映画ですね。東北の小さな村、そこにあるJRの駅の待合室に、その駅の近くのお店の方が置いている1冊のノートがあるんですが、そのノートに、そこを訪れる人たちがいろいろ書き込んで、それからお店の方がまたそれに答えるというふうな形で、そのノートがかなり長くつづられております。それ実際にあった出来事らしいんですね。そのことを基に、人々、その土地の方と旅人との交流を感動的に描いた映画でございます。そういう劇映画も撮られて、その映画も東北の寒村でしたけれども、現在は東北に非常に関心を持たれて、津波地域とか、最近は福島のほうにかなり足しげく通われて、浪江町にお住まいだった方々のインタビューをされて、今日の映画を撮られたわけです。ということで、早速映画を拝見したいと思います。板倉さんを、ご紹介いたします。よろしくお願ひします。

板倉 板倉です。はじめて。私ずっとヤクザものの脚本を書いておりまして、東北を舞台に1本映画を監督しました。縁あって、今、浪江のほうに行っています。なぜ浪江に行くんだとか、原発事故、原発に関することに興味を持ったのか、お手元の資料に配布されたものがあると思いますので、興味のある方はぜひそちらを読んでいただければと思います。それと先ほど、完成まだ半ばだという話があったんですけども、今回シニア社会学会のほうから義援金をいただきました。それは大きな励みとなりまして、有効に使って、何とか一つの完成にたどり着きたいと思っております。まずはそのシニア社会学会の皆さんに、この場を借りてお礼を申しあげます。ありがとうございました。



それと、これ第5回ということですけれども、とにかく先ほど袖井会長からもお話をありましたけれども、風化させないためにも、記録を残すためにも、記憶を残すためにも、体が続く限り、20回、30回、40回、これはもう22世紀にまたがってでも語り継いでいってもらいたいと思います。かなり震災直後は原発いらないという話がたくさんありましたけども、人間っていうものは流されると怖いもので、かの戦争のときもそうでした。多くの人が知らないまま、とんでもない悲劇を生む戦争に突入してきました。それだけはわれわれは絶対に認めなくてはいけません。その願いを込めてカメラを回し続けています。ということでよろしいでしょうか。しゃべるのはあまり得意じゃない。それでは映画の上映、始めますので、よろしくお願ひします。

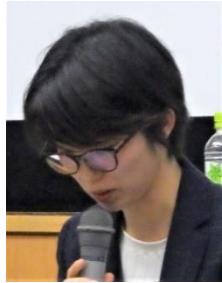
■座談会■

川副 これから座談会を始めさせていただきたいと思います。私は東洋大学の川副と申します。今日は司会を務めさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

松村 早稲田大学の松村です。同じく司会をやっていきますので、よろしくお願ひいたします。

川副 座談会の開始に先立って、最初に私から今回のシンポジウムの趣旨を説明させていただきます。

震災発生からもうすぐ8年になりますが、今なお避難区域の地域もありますけれども、避難指示が解除されてきた地域も徐々に多くなってきました。実際に帰れる地域も増えてきているのが現状です。本日お話ししいただきます浪江町と富岡町の場合は、それぞれ帰還ができる地域とできない地域の両方があるというのが現状でございます。



現在、福島県からの避難者数は、4万3214人です。そのうち県内避難者が1万54人、県外避難者が3万3147人です。避難者数は2012年の5月にピークに達し、16万2000人ぐらいの方が避難をしていました。当時は県内の避難者の方が多い傾向がありました。現在は、全体としては避難者数が減ってきており、県内県外の避難者数の割合が逆転しています。

しかし、避難指示が解除されたとしても、すぐに避難者の方が避難元地域に戻って生活するというわけではありません。表1は避難指示が解除された地域において帰還した住民数を示しています。2016年以降、多くの地域で避難指示が解除されてきているわけですけれども、帰れるようになつたからといってすぐに帰るわけではないことがこのデータからお分かりいただけるかと思います。双葉8町村の住民の避難先定住先の分布を見ると、広野町、楢葉町、川内村は戻っている方も多くいらっしゃるわけですから、避難先にいらっしゃる割合もかなり多いです。浪江町とか富岡に関しても、町に戻っているのはわずかであるというのが現状になっております。

表1 旧避難指示区域の住民帰還率

旧避難指示区域	解除時期	対象者(人)	居住者(人)	帰還率(%)
田村市都路地区東部	2014年6月	287	230	80.1
川内村東部	2014年10月	298	85	28.5
	2016年6月			
楢葉町	2015年9月	7,140	2,270	31.8
葛尾村	2016年6月	1,328	256	19.3
南相馬市小高区など	2016年7月	9,286	2,887	31.3
浪江町	2017年3月	14,909	490	3.3
飯館村	2017年3月	5,612	607	10.8
川俣町山木屋地区	2017年3月	946	285	30.1
富岡町	2017年4月	9,396	429	4.6
全体		49,202	7,539	15.3

(出典：河北新報 2018年3月4日)

この＜帰る一帰らない＞の判断に関しては、当然すぐ決められるものではありません。仮に帰ると決めた人でも避難先とのつながりがすぐに消えるわけではありません。また、帰らないと決めた人もふるさととのつながりをきっぱり切るというわけでもありません。このように二つの地域に関わりながら避難生活を継続しており、あるいは自分の避難生活は終わったと考えている場合も今までとは違う形で関わりを続いているというのが現状です。多くの人が避難元と避難先と多様なつながり方を持っているということです。

本日は富岡町と浪江町の方3名にお越しいただいて、複数の地域と今どのように関わっているのか、それはどのような生活なのか、今後どう関わり得るのかということをお話しいただきたいと思います。私たちはその複数地域とかかわる生活のあり方を学び、今の社会のあり方や地域社会との関わり方についても考える機会にしたいと考えています。

では、3人の話題提供者の方のご紹介いたします。まず一人目は、浪江町出身で現在は東京にお住まいの大坊雅一さんです。次は富岡町からいらして、今東京にお住まいの二俣公子さんです。そして3人目が富岡町出身で、今いわき市に住んでいらっしゃる田中美奈子さんです。

大坊 座ったままで失礼します。私は浪江町で、うなぎ店を営んでおります。3月の11日の震災の翌日の12日、避難命令を受けて、県内の避難所を経て3月14日、日付が変わる頃、東京に避難してまいりました。とういうのは、子どもたち二人とも、こちらで職を持っていたり、嫁ぎ先がここ東京だったのでこちらに避難してまいりました。以上です。

二俣 富岡町出身で、主人の実家が東京にあったので避難して、男の子二人の母です。

田中 田中と申します。震災のときは千葉県のほうまで避難をしていました。次の年の1月にいわき市に戻りました。現在いわきで生活をしております。よろしくお願ひいたします。

川副 ありがとうございます。では次に、浪江町と富岡町の現在の復興の様子についてお話しいただきたいと思います。写真をご用意していただいていますので、スライドを見せていただきながら、お話をいただければと思います。

大坊 去年は震災の状況、いわゆる被害の状況のような写真を用意したんですけども、今年は復興のほうの状況を説明する写真を持ってまいりました。写真1が第一地銀で県の金融出納の金融機関でもある銀行が、営業を再開した仮店舗です。

写真2が浪江町に戻る人たちのための改装・改築、もしくは新築を受け付ける窓口となる建設業組合です。



写真3が町の中に2軒営業しているローソンの一軒です。国道6号線というメインの通りに面して、役場の敷地と隣接しています。お昼近くになると、お昼の食料品を買いあぶれる方も出るぐらいにぎわっています。朝の7時から夕方の8時か9時ぐらいまでの営業になっています。まだまだ24時間営業まではいっておりません。

写真4が金融機関の一つのJA農協さんの店舗です。窓口には必ず、待合には人がいて、窓口の人と親しげに声を掛け合って、話をしに来たのか、用事があつてきたのか分からぬようなところもあります。

写真 5 は避難指示解除前から営業している信用金庫です。あぶくま信用金庫という地方の信用金庫です。

写真 6 がスナックです。2軒が開業しております。さみしかった夜に、ささやかなにぎわいを添えています。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8

写真 7 は浪江駅です。浪江と富岡の間に駅が三つあるんですけれども、その所はまだ不通になっています。この大型バスで、浪江と富岡の間を結んでいます。50人乗りのバスで、大体平均一人か二人ぐらいの利用者です。

写真 8 は駅前のロータリーです。今、奥に見える建物が 2020 年の 3 月、常磐線の再開業とともにそこ



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13

がカフェになる予定になっています。

写真 9 は浪江の駅です。珍しくこの日はお一人乗車する方がいらっしゃいます。良かったです。いつもは駅員さんの写真しか撮れません。

写真 10 が駅から 50 メートルぐらゐのところのマンションと、運営経営している不動産の事務所です。マンションもきれいに掃除も除染も終わって、これが恐らく中間貯蔵施設の減容化施設を作る大手ゼネコンの作業員の方々が利用するといううわさです。

写真 11 がマンションですね。ちょうど私のところの敷地から、前は建物に遮られて上階の二つぐらいしか見えなかつたんですけど、取り壊しが進んで今は全部一階から見渡せるようになりました。

写真 12 が解除前から営業して自転車屋さんです。初めのうちは皆さん立ち寄っていたようなんんですけど、今はもう立ち寄る人も少なくなっています。やっぱり再開したお店の継続的な営業には若干問題があるかなと思います。

写真 13 は間もなく開業を再開する修理工場、民間車検場です。

写真 14 が民宿と一階がスナックになってます。今の民間車検場のすぐ隣にあります。

写真 15 が駅の西側、まだ乗降口ができてないんですけど、このスポーツセンターの建物なんですけど、本来なら 3 月の 11 日の後、3 月の 20 日ぐらいに確か建物の引き渡しの式が行われる予定でした。解除になって、割れたガラスを交換したりして、今は町民の集会所、もしくはコンサートやイベントに使っています。

写真 16 が先ほどのスナックの夜の風景です。やっと夜に民間の明かりがともるようになりました。これで終わりです。以上です。

川副 ありがとうございます。続いて田中さんにお話しいただきたいと思います。

田中 昨年の 4 月に解除しました富岡町です。写真 17 は駅の写真ですが、大変立派にできました。やっと普通の町ができるのかなというような感じで、檜葉まで来ていた電車が昨年の 11 月に富岡まで来るということになったところです。残念ながら、大熊、双葉の間が開通しておりませんので、いつになったらこの常磐線は仙台まで通じるのかが今一番の課題かもしれないです。大坊さんがおっしゃったように、駅前にはスナックとかいっぱいありましたが、それが全部撤去されてしまいました。今は、駅と、商工会の青年部の皆さんのがつくったホテルができていて、富岡町の玄関先がきれいになってきたところです。



写真 18 は長田地区という所で、住宅はほとんど撤去されまして、今できているのはアパートですね。時々見に行くと、「え、またこんなところにアパートができているのかな」なんていう感じで、どんどんアパートの建設が進められているのが現状です。

この写真（写真 19）は震災のときに、国道沿いにありますパチンコ屋さん。もう 8 年もたつたので、1 日も早く撤去していただきたいっていうのもあるんですが、でも私たちにすれば、これが震災のときの現状なんですとご案内するのにちょうどよい建物になっている感じがします。

これが、『ふたばいんふお』といいまして、国からお金をいただいて、双葉郡全部の町村の展示をしていて、その脇にかわいらしいカフェができました（写真 20・21）。オーナーに頼まれまして、私はそこで今 11 時から 2 時まで、コーヒーや定食を出しています。先月の 11 月 5 日に開店したんですが、素人だけがやっておりまますので、「富岡の母さんたちの味」とちょっとウケているかなという感じもしているところです。どうぞ富岡を通ったときには皆さんにも寄っていただければと思います。中ではこのように展示しております。どなたでも見ることができますので、来ていただければと思います。

これが双葉医療センター付属病院ということで、これも4月から始まりました。ヘリポートが用意されています（写真22）。東電さんのお仕事関係でけがをされたりとか、または重病人が出た場合には、そこから医大とかいわき市の共立病院のほうに搬送がいつでもできるようになっています。ただちょっと残念なのは、大きい病院にかかるときは町のお医者さんの紹介がないとなかなか診てもらえないところもあるんですが、ここもそのような感じになっています。でもそれでは何のためにできたのか分からぬということで、町民も普通に入れていただけるような状態をつくっていこうということになっております。



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21



写真 22



写真 23



写真 24

浪江さんはスナックとかいろいろいっぱいできていると思うんですが、富岡まだまいろいろの飲食店がないので、大変不便をしているところなんですが、唯一この『ぼっけもん』さんが今年始まり、夜も営業しています（写真23）。

あとこれは解体・除染作業中の様子ですね（写真24）。残念ながらおうちちはほとんど解体されてしまっております。残されているおうちが少なく、帰れない町になっているのかなというような感じです。

写真25は『さくらモールとみおか』で、これは一昨年の11月から、町が帰町する前にということで始まった『さくらモールとみおか』です。ここがあるから、普通のお店がなかなか開業できないというようなことがあるのかなという感じもしています。双葉郡は6町2村からできている町ですが、その町々でいろいろと違った取り組みをされています。富岡町はできるだけ集約をしようということで、こういう風に飲食店や日常品店などいろいろな店が入れるような所をつくってしまったので、それがあるからまたなかなか普通の個人のお店が遅れているのかななんていうようなところも。どっちがいいか分からないというのが今の現状でございます。



写真 25

川副 ありがとうございます。それぞれの町の現状と課題も含めてお話しいただきました。次は皆さんご自身のお話に移っていきたいと思います。皆さん共通してお聞きしたいことは、今、住んでらっしゃるところがどこか、そこから避難元にどれぐらいの頻度で帰宅されているのか、避難元と避難先それぞれの地域にどういうかかわりをもっていらっしゃるのか、ということをお話しいただければと思います。大坊さんからお聞きしてよろしいでしょうか。

大坊 私は、二俣さんもそうなんですけれども、江東区の国家公務員宿舎、豊洲の近くですけれども、その東雲住宅で避難生活をしています。非常に便利なところですね。バスの便もいい。豊洲まで歩けば地下鉄も使える利便性の高い所です。私は浪江町でも駅前で、小学校まで100メートル、駅までも100

メートル、今、町役場移転しましたけども、かつての町役場までも 100 メートル、また高速バスの乗り場もほとんど目の前、そのような所にいたのですが、それに比べても東雲住宅はとても交通の便のいい所です。

浪江町には月に 1 回か 2 回戻ります。多くは、例えばイノシシやハクビシンなどの有害な獣畜にあらされていないかという確認と、それから月 1 回の清掃、それから商工会の関係で戻るときもあるものですから、会議や祭りの準備です。復興にも若干かかわりながら生活をしています。以上です。

二俣 今の所に至った経緯をお話しします。先ほどの自己紹介のところで言ったかなとも思うんですが、富岡町に住んでいまして、主人の実家が東京なので、その関係で避難を東京にして、5 月ぐらいに東京都の住宅の募集があったので、主人のお母さんのところでは手狭なので、そちらを申し込んで、東雲が抽選で当たったっていう感じで、東雲のほうにお世話になっています。

富岡町のほうには、震災後、うちの両親がいわきのほうに避難していたので、そこら辺から月 1 回とか、あとこの何年かで二人とも亡くなつたので、その関係で結構行ったり来たりしていました。

松村 富岡の住宅は今どうなっているのですか。

二俣 私の自宅は取りあえず取り壊しにしないで、そのままにしてあるので、子どもたちの受験や卒入学が落ち着いたらクリーニングをこれからかけて、住めるようにしたいなと。

松村 帰宅できる場所なんですね？

二俣 そうです。居住制限をもう解除されたので、自由に。

川副 では田中さんはいかがですか。

田中 私は震災のときに仕事をしていました。地震が来て、うちへ帰って、今度町の避難所である福祉センターのほうに避難をしました。それからその晩、全然電気も何にもつかなかつたんですが、町の職員の方が自家発電を持ってきてくれて、発電してくれたので、テレビが映りました。そのときにちょうど東電さんのところが映っていて、何か起こらないかななんていうような話をしましたら、翌日の朝 5 時頃、役場の職員の方が来て、東電さん危ないかもしれないから避難しなさいということで、最初は川内村に行き、それから友人を頼って常葉町、郡山市、最後には千葉県の君津市という所にお世話になりました。そこで 10 カ月ほどお世話になって、そのうちに早く帰ってこい、何してるんだなんてみんなからせかされまして、いわきのほうに戻りました。いわきのほうに戻ってすぐに一時帰宅がありました。自分のうちに行ってみたら、もうすごいので帰れないのかななんていうような感じを受けました。現在は富岡町を行ったり来たりしながら生活を続けています。





松村 どうもありがとうございました。それでは、これまで皆さんに共通のことについてお聞きしましたけれども、これからは個々の方で少し事情が違いますので、個別にお聞きしていこうかなと思います。まず最初に大坊さんにお聞きしたいんですけどよろしいですか。まずお聞きしたいのは、浪江も帰還できるようになっておりますが、大坊さんご自身はいつ頃帰還したいとお考えになっておられますか。

大坊 店の再開というふうなことを目指しておりまして、制度資金を使いたいものですから、そんな申請で、早ければ来年の3月申請を出して、その結果が分かるのが来年の5月ぐらいかなと。そこから大体5カ月ぐらいをかけて、店の改裝や新しくつくる作業所を新築して、申請が許可されれば2020年の年があらたまた頃かなと思っていますが、あくまでもこれは自分の予測なので、果たしてそのとおりにいくかどうかは、まだわかりません。

松村 ありがとうございます。そうしますと、その間は行ったり来たりということになりますね。

大坊 そうですね。先ほども申したとおり、商工会の理事となりました。私のようなあまり活動の少ないような者まで役員にせざるを得なくなつたという事情がありまして。それでこの12月の18日もまた向こうに行って会議があるんですけれども、役員の多くは業務を再開している人でも、町外から通っている人がほとんどで、町の中に住んでいわゆる町の中で仕事をしている人たちは、まだ少ないです。営業活動ができるような人たちもそのような状況なので、ただ戻って暮らすだけの人たちの帰還、もしくは再定住は、なかなか難しい状況です。

松村 そうしますと、大坊さんご自身、順調にお店が再開できたとして、この東京の拠点はどういうふうになるんでしょうか。

大坊 自分では非常に浅いものの考え方の一つではありますけれども、やっぱりどこの自治体でも過疎化とか人口の流出っていうのはあるので、これも一つの案としては、やっぱり複数箇所の居住、かつての別荘生活ではないですけれども、田舎に自分の縁かゆかりがあるような、もしくは何にもない所でも、今のふるさと納税のような形で、何カ所かに自分の拠点、生活の拠点を設けることができれば、例えばいろんな税制の問題とか住民登録の問題とかありますけれども、そんなものをクリアできれば、見かけの人口が増えるのでうまく活用すれば人口減少とか過疎化のスピードを緩やかに減速できるのではないかと思います。

自分のことに戻せば、やはり仕事にかかりきりになるので、いったんは向こうに戻った段階で、こちらの拠点の維持は難しいのかなと思います。なので、浪江に戻ったときには浪江に居住という形になると思います。ただやっぱりストレスとか緊張とかそんなものを考えれば、もう1カ所どこかに家があるような、隠れ家ではないですけれども緊張を解きほぐす所があればいいなとは思っております。

松村 そうしますと、完全に浪江に戻られたとして、得られるものはどういうものですか。それから失ってしまうものはどういうものですか。まず得られるものから。

大坊 得られるものっていうのは、恐らく自分の履歴のほとんどが浪江町に置いてあるわけですよね。

その履歴の再確認ができるだろうと。ただやっぱり先ほどから皆さん映像でご覧になって分かるように、コミュニティそのものがもう喪失しているので、自身が所属する組織の中で少しずつコミュニティを広げていく必要があると思います。さらにお得意さんが消えている。そういう中で、果たして自分の仕事がどのようにしていくべきなのか、毎日自分との対話の中で、ちょっと不毛な対話が始まるのかなっていう危惧はあります。ただ帰ってみないと、本当に失ったもの、得られるものが分からぬいんすけれども、少なくとも自分で店を再開することによって、ある意味では小さい憩いの場を自分にも、また戻った人たちにも提供できるのかなという思いはあります。

松村 その一方で、今、東雲も7年以上住んでいらして、そこを離れる場合に失うものっていうのはどういうものになるでしょうか。

大坊 私は逆に言えば、かかわりがなくなつてホッとする側ではないかと思います。ちょっとドライなもの言い方をして申し訳ないですけど、やはり被災者が被災者の面倒をみるとっていうのは限度があると思います。やはり7年間というのはかなり長い、十分すぎるぐらい長い期間で、これほど長い避難生活をさせておくのがいいのか悪いのかという検証は、これから課題としてお任せするしかないのでしょうけれども、私は7年は長すぎると思います。

松村 大坊さんご自身は、東雲の生活は本来の姿ではないというふうにとらえていらっしゃるんですね。

大坊 やはり仕事から放り出されちゃったとか、仕事にかかわれないというのは、非常に自分にとってはじくじたる思いと、つらく悲しい出来事だったので、何とか自分を取り戻すためには仕事に復帰できたほうがいいのかなという思いがあります。またこれは意見が異なると思うんですけども、女性(妻)はそういう仕事というところには視点の重きを置かないようなので、そういうところではよく価値観のぶつかり合いがあります。

松村 奥さんの話が出ましたので、じゃあ今度は二俣さんにも同じ質問をさせていただきたいと思いますが、二俣さんはお聞きしたところ、中学生と高校生の男のお子さんがいらして、どちらも受験という大変なときにさしかかっているそうですので、お子さんが成長するまでもうしばらくは多分富岡にはお戻りにならないんだろうと思いますが、でもお子さんが成長した後で富岡に戻る場合、何が得られるんでしょうか。それからその場合、何を失うことになるんでしょうかという同じ質問をしたいと思います。

二俣 いろいろ考えるんですが、なかなか難しい質問で。自宅に戻つて得られるもの、自分的には富岡町に戻りたい。ついのすみかとして富岡町に自宅を構えていたので、この8年とか過ぎても、やはり戻つて自分の家がいいなっていうのはあります。あと失うものといったら、ママ友とか。子どもたち、当時小学校1年生と小学校4年生だったんですが、結構すぐ東京の暮らしに慣れて、もう今は標準語で、都会の子どもになってしまっているんですけど、子どもを通して、お母さん方の交流が結構あったので、そういう築いてきたものがなくなるのがちょっと寂しいかなって思います。

松村 さっき大坊さんの奥さんのお話の中でチラッとしたのは、大都会の雰囲気といいますか、そういうものはやっぱり女性のほうが求めていると。その点はどうですか。そういうにぎわいとかそういう

ものについては。

二俣 私は田舎育ちなので、東京はすごく刺激はあって、毎日すごい楽しかったり、変な話お金がかかるたり、いろいろあるんですけども、私としては人の多さに圧倒されたりするので、やっぱり自然の多い田舎がいいですね。

松村 そうすると、富岡に戻ったら、気持ちの上でも落ち着くだろうというようなことは考えられるんですかね。あと大坊さんと二俣さん、二人とも東雲で『東雲の会』という避難者の自治会で役員として、いろいろ避難者の方のための活動をされてきたわけですけれども、この自治会の存在っていうのは、避難者の方にとってどういうものだったとお考えになりますか。

大坊 『東雲の会』は、入居の初期の段階で、1市2町、南相馬市、富岡町、浪江町のみが入居対象者だったんですね。それで初めに東京都庁で受け付けてくれた都営住宅の入居、もしくは公営住宅の入居、そこの抽選に漏れた者が、東雲住宅に入ったんです。逆にわれわれははずれて、都営に入った人がうらやましくてしょうがなかったんですけども、そこから1年ぐらいたったときに、都営に入られた方から、あんたたちはいいわねって言われて、ちょっと複雑な気持ちになりました。その1市2町の中でそれぞれの町の世話役が選ばれ、その人たちが『東雲の会』の役員になりました。つまり、「東雲の会」の役員はその1市2町から避難してきた人たちと支援する人たちをつなぐ目的で設立されたものでした。その後に都内の各避難所が閉鎖されるとともに警戒区域外からのいわゆる自主避難者の人たちの入居もはじまり、結果としてその方たちの世話もすることになりました。「東雲の会」は必要に迫られ、自動的に出来上がった会ではないので、そういう意味ではいろいろ問題があります。

松村 二俣さんも役員をやっていらっしゃいますけれども、具体的にどんな活動をされてこられたのですか、自治会の役員としての活動としては。

二俣 私は最初からではなくて、途中から入りまして、ぶっちゃけ若手の力も欲しいじゃないんですけど、若い人の手助けも少しあつたら助かりますっていうことで、皆さん忙しいので、私で良ければっていう感じで入りました。結構細かいことに忙しいっていうか、毎回いろんなことがあって、それに対応するのに追われることが多いですけど。東雲は、いろんな町が入っているので、いろんな方々が支援に来たりとか、ボランティアに来たいとかっていうのがあるので、そういうので結構忙しいですね。

松村 イベントとか催しにはどんなものがあります、今も続いているものは。

大坊 だいぶ支援のイベントとか支援事業も少なくなりました。継続して行っていただいているのは、明治神宮からの奉納の野菜を、御下賜していただいております。「明治天皇祭」や「新嘗祭」ですね、そういうときに奉納された野菜などを、今まで恵まれない子どもたちの施設とかそういう所にお配りしてもらいたいんですけども、その中の一つに私たちの『東雲の会』も入れていただいて、ついでに、奉納された野菜とか果物をいただきまして、皆さん感謝の気持ちでいっぱいでした。入居当初は本当にいろいろさまざまな支援事業がありました。例えば東京都内観光であったり、あとはパソコンこれからは使えたほうが仕事も見つかりやすいだろうということで、ヒューレットパッカードのコンピュー

ターエ会社の方たちはパソコンの教室を開いてくれたり、本当に物心両面から支えていただきました。今はもう退去する時期が近づいてきているので、収束に向かおうということで、あまり支援をいたしかないうような方向で動いています。

松村 ありがとうございました。田中さん、だいぶお待たせいたしました。例えば、今、自治会の話なんかも出てきましたので、これからは川副さんがお話を聞きします。

川副 田中さんは、いわきに戻られてから「いわき市在住富岡町民自治会『すみれ会』」を立ち上げられましたが、その立ち上げの経緯についてお話を教えていただけますか。

田中 いわきに1月に戻ったんですね。4月頃になりましたら、町会議員の先生も来て、田中さん、自治会を立ち上げてくれというような話になったんです。自治会っていっても、どこに誰がいるのか、どのぐらいの人が住んでいるのか、全然把握もできていないところで、自治会を立ち上げるってどうしようっていうことで、まず友達に話しました。女性だけ6人ぐらい集まって、それに町会議員の先生と話が始まったのが自治会の立ち上げです。最初は30世帯ぐらいあれば立ち上げられるかななんていうことで始まったんですが、それが立ち上げる設立総会をしようというときには、50世帯ぐらいの申し込みがありました。これは全部口づてで広まり、友達が友達に言って、また友達にという形で、50世帯ぐらいで発足をしたのが、翌年の9月だったと思います。それからどんどん増えていきまして、今は110世帯ぐらいの自治会になっています。

当時、仮設住宅とか、町と避難したビッグパレットの方々とかには、支援物資がどんどん届いたんですね。ところが、私たちみたいに勝手に避難した人は、町に逆らって自分たちで避難していたというような雰囲気に取られてしまった感じでした。でも町と一緒に歩いていたら町も破裂しちゃうんじゃないかな。やっぱり個人避難していた人たちがいたので、町と避難していた人々はうまくいってたのかなと。ただ、ビッグパレットというところに富岡の人たちは避難してたんですが、私が千葉から行って、「布団がないんだよね、布団もらってきてたいんだけど」って言ったら、山ほど積んであるんですよ。でも「これはもうすぐできる仮設住宅のほうに持っていくからくれられね」って言うわけです。それなら、「じゃあ違うのもらってっていい」って言ったら、それも駄目。なんで、同じ住民なのに、仮設住宅にいる人はもらえる、勝手に行った人はもらえない、そんな話ないじゃないかという怒りに燃えて千葉に戻ったんです。それからいわきに戻って、自治会を立ち上げたほうがいいんじゃないかということで始めました。

この自治会はほとんど女性です。私たちの自治会に男性がいないんです。会長から会計、全部女性です。かえって女性の自治会のほうがまとまりがあります。男の人にぶつぶつ言われるよりも、女から言わされたほうがまとまりがあるんですね。だから、もう何年になりますけども、結構自治会は続いています。

川副 ありがとうございます。今、自主的に避難したというお話と、それから町とともに避難したというお話がありました。同じ町民でも、役場と一緒に避難所に行って仮設住宅に入る方と、個々人で避難されて借り上げ住宅に入った方に分かれたわけですね。今回の原発事故では、仮設住宅を全ての避難者に提供することは難しかったわけで、県からの家賃補助を受けて、みなしふと呼ばれる借り上げ住宅に住んだ方がたくさんいらっしゃったんですね。そういう方々は、仮設住宅に避難された方とは別の避難生活上の課題があったけれども、そういうものに対応する仕組みがありませんでした。そういうと

ころに着目されて、広域自治会『すみれ会』を立ち上げられました。では、すみれ会は具体的にどんな活動をされていますか。

田中 最初は自治会が始まつてすぐに、放射線の説明会とか、補償に関する説明会などを具体的に進めていったんですが、私たちの自治会はそういう難しいことでは人が集まらないんじやないか、楽しくやろうということで、時々集まってお茶飲み会とか、あとは暮れになるとちつき大会とか、新年会とかをしています。難しいことは男性に任せよう、簡単にできることから始めようということで、本当に集まって騒いで楽しくしています。ただ残念なことに、女性は声をかけるとどんどんお母さんたちがいっぱい出てきましたが、出てこないのはお父さんたちですね。もう黙って下に向いている。なるべくお父さんたちも引っ張り出そうということで、そういう会に一回出てくると楽しくなつからなっていうことで、少しずつ男の人の参加も最近は増えてきております。

川副 ありがとうございます。先ほども質問がありましたけれども、広域自治会は、参加している町民にとってどういう意味や意義があると思われますか。

田中 町からの連絡とか、いろんな場面で自治会を通じて町とつながつていける。最初は1世帯2000円の会費ということで、それといろいろなことに参加をして、役員の人たちがもらった報酬の中から何パーセントかは会に入れるとかいろいろなことをしていたんですが、一昨年から町から補助が出るようになりました。自治会にも1世帯につき幾らというような感じで補助が出るような感じになりましたので、そちらの補助を使いながらやつてます。

いくらみなしふたとか仮設にいるとか、町から離れているといつても、まだまだふるさとは富岡町なので、町を捨てるということは、皆さん、できないと思うんですね。できるだけ町とつながつていきたいというような気持ちが大きいかと思うんです。多分今日ここにいらっしゃっている方々も、双葉郡からいらしての方だと思うのですが、絶対に皆さんもふるさとを忘れるということはないと思うんですね。だからできるだけ、そういう自治会とかいろいろな会を通じて町とつながつていこうというようなことが、私たちの一番の目的です。

川副 ありがとうございます。さきほど地図で見ていただいたとおり、帰還が徐々に可能になってきていますけれども、「すみれ会」のなかで富岡町に戻られた方もいらっしゃるでしょうか。その方々は帰還後もすみれ会に関わりは持たれているのでしょうか。

田中 会員の中に、富岡町に戻られて、おうちを建てたり、復興住宅に入ってる方が、大体10世帯のうちの3世帯ぐらいいます。でもやっぱり『すみれ会』は逃さないでちょうどだいね、町に戻つても会には席を置いてください、と言っています。やっぱりそのきずなつていうんですかね、8年のきずなつて大きいですよね。それを戻つたからすぐに外れるのでなくて、それはそれで一緒にまた行動していきたいっていうようなことで。でも戻られた方は皆さん話しています。「やっぱり富岡はいいな。緑もあるし、うちの前も広いし、何をしてもせいせいしていいぞ、早く帰つてこい」なんてね。富岡に戻つた人たちから声をかけられています。

川副 ありがとうございます。田中さんご自身は『3.11を語る会』やお仕事で富岡町に通つていると伺

いましたが、すみれ会の自治会活動以外での富岡町とのかかわりについて聞かせていただけますか。

田中 先ほども大坊さんもおっしゃったように、私も割と町政にかかわっていることが多いと思いますね。商工会はやっぱり人数が少なく、理事という役職をいただいたり、あと『富岡町3.11を語る会』という会も女の方が代表なのですが、その中で私は、にわか語り部ということで、富岡町町内を案内させていただいている。東電さんができたときのことから、現在に至るまでのことを、事細かく、そして「前にはこういうふうな所になっていたんですが、このぐらいに回復しましたよ」なんていうことで、バスのツアーでいらっしゃる方々や、あと個人的に来てくださる方々のご案内をさせていただいたりしています。

一つ、本当に私が忘れてはいけないと思っていることがあるんですが、千葉の君津市というところに避難したんですが、そこで日本赤十字社の女性部の方々に大変お世話になりました。月に1回ランチ会とか、いろいろなところに連れて歩いていただいたりしました。その委員長さんをやっていた方と親しくさせていただいて、私が1月に戻った後の5月には40人ぐらいで訪ねてきていただいて、いわきで食事をしたりして帰られました。その方が5月30日にいわきに来てくれて、ぼっくり6月20日に亡くなってしまった。でもその委員長さんが亡くなっても、今もその君津の赤十字社の皆さんとは行ったり来たりさせていただいていまして、勝浦の日赤の方々が私がいわきに戻ってからすぐに23人ぐらいで訪ねてきてくれて、また今年も来てくれました。この前は同じく千葉県鎌ヶ谷の日赤の皆さんのが来てくれて、そういうお付き合いもさせていただいていますので、これは続けていかなくちゃいけないなというような感じで頑張っています。

川副 ありがとうございます。今度は田中さんご自身のことを伺いたいのですが、なぜいわき市に戻られたんでしょうか。田中さんにとって、いわきとはどういう地域なのでしょうか。

田中 震災後、娘と一緒に千葉に行っていたんですが、仕事関係でいわきに戻りました。今、住んでいるのは郷ヶ丘というところなんですが、そこに私の兄がおりましたし、いわきというのは双葉郡のお隣だということで、これから富岡と行ったり来たりするのにも何するのにも、いわきでないのかなっと。福島とか郡山に行ったんでは、どんどん離れていくてしまうので、できるだけ富岡に近いところがいいのかなということで、いわきに住み着いてしまいました。

川副 田中さんの富岡町のお宅は今どういう状況にありますか。どれぐらいの頻度でご自宅に帰られていますか。

田中 私のうちは昨年の1月に解体してしまいました。だからさら地になっております。戻った方々には早く富岡に戻ってこいって言われるんですが、いわきにうちを建ててしまったので、富岡に建てる財源が残っておりません。ですからもうしばらくどうなるか分からないということで、富岡には行ったり来たりはしますけども、まだまだ富岡に戻るという時期は検討できておりません。

松村 それではこのディスカッションの最後の質問です。大坊さんが一番具体的に家に戻られるという予定があるので、戻ったときの困難というのは、どんなものを想定されていますか。

大坊 全ての町の文化がゼロに近い状態、特に民俗学っていうか、そこにかかわるような、例えば神社やお寺とか、住職、神主がいるいないにかかわらず、神社とか仏閣が抱えているような文化を、誰がどのような形で維持していくのか。それと、町の行政区のところにも、ほとんど住民が戻っていない状態ですよね。一つの行政区に対して、大体2、3軒の住民しかない。かつては100世帯以上ありました。そのような町の基本的な細胞の一つ一つの単位を、どうやって維持して、さらにその少ない細胞を活性化させていくのかというような課題はいっぱいあると思います。それを解決させようとすれば、やはりそれは何らかの組織を通して、もしくは自分の代弁者を誰にするのかっていう形に置き換えて、発信していくなくてはいけないのかなって思います。

松村 大坊さんはうなぎ店をまた再開されるってことですけれども、当然お客様が必要ですよね。その点についてはどういう見通しを持ってらっしゃいます？

大坊 ある意味では見通しは立ってないんですよ。とても高額な食品なので、お得意さんがほとんど戻らない。さらに暮らし向きのいい人から町を離れる可能性が高いので。そうなってくると、かつてのうなぎ店という看板だけで食べていけるのかというと、それははなはだ不安で心もとないところはあるんですけども。恐らくはなかなか難しいかなと思います。

松村 ありがとうございます。戻られるときの困難っていうのもかなり予測されるのもあるかなと思いますけれども、一応ディスカッションの時間が来ましたので。

川副 3人の方から、それぞれ避難生活の現状、帰還への展望、故郷とのつながりについてお話しいただきました。それぞれに違う状況があるということをご理解いただけたかと思います。後半は、これらのお話を踏まえて、二人のコメントをいただきまして、全体討論としたいと思います。皆さんには質問用紙をお配りしていますので、何かこの3の方にお聞きしたいことがある方はご記入いただいて、私たちスタッフに休憩時間中にお渡しいただければと思います。ありがとうございます。

■パネルディスカッション■

川副 では時間になりましたので、後半を始めさせていただきたいと思います。後半は、二人のコメントの方にコメントをいただき、それに関して3人の方からまたお答えいただくという形で進めさせていただきます。まず一人目のコメンテーターをご紹介させていただきます。伊藤まりさんです。伊藤さんは東京出身で浪江町に移り住んでらっしゃいました。震災後の現在は横浜市に在住ということです。伊藤さんにはこのシニア社会学会シンポジウムの第1回目からかかわっていただいておりまして、これまでの議論にも参加していただいておりますので、そういったことも踏まえながらコメントをいただければと思っております。よろしくお願いします。

伊藤 皆さん、こんにちは。まさか私が震災後に映画女優になるとは思ってもいませんでした。今、私は横浜市に住んでおります。登壇者の皆さま方、月に1回は福島に戻っているという先ほどお話がありましたけれども、私も月に1、2回、福島へのほうに戻っております。今日の二点居住というテーマですが、大坊さんが浪江に戻ってうなぎ屋を再開するというお話を聞いて、非常にうれしく思いました。



ただ、現実的には、先ほど川副さんからもお話がありましたように、浪江に戻っている数というのは、今現在で約800人ですね。その800人の中でも、実際は夜になると隣の南相馬市であったり、いわき市であったり、避難先へ帰る。仕事のためだけに戻るという方々もいます。また一度は浪江に戻ったけれども、やはり生活するには不便だということで、また元の避難先に戻ってしまったという方もいます。ですので、統計上では約800人なんですけれども、実際に浪江で生活している方というのは、その半分ぐらいしかいないんではないかと思います。浪江町…大阪市と同じぐらいの面積の中に、400人、500人程度しかいないということですので、実際に大坊さんがうなぎ屋さんを開いて、そこで商売が成り立つかというと、非常に大きな困難が待っているんではないかと思います。

ただ、やはり誰かが戻らないと町は復興できない、町は生き返らない。先ほどの映画の中でも商工会長の原田さんの奥さまが言っていましたが、「何年か前は自分たちが戻って礎になろうと思った。フロンティアになろうと思った。ただ実際はそんなに生やさしいものではない。」…本当にそうだと思います。大坊さんもこれから浪江に戻るということですが、本当に私たちにとってはふるさとの味、思い出の味ですので、頑張ってフロンティアになって町をつくっていっていただきたいと思います。

それから同じ東雲住宅の富岡町の二俣さん、それから田中さん。先ほど、富岡町の映像をずっと拝見させていただいたのですが、浪江、大熊、双葉、富岡、これは別々の町ではなくて、全部一緒に私たちの地域なんですね。車で走らせると5分過ぎると隣町、また5分走らせると隣町ということで、桜の時期になると私たちは富岡町に行き、恐らく田中さんたちは日頃の買い物のときは浪江町に行き、という感じで、別々の町ではなくて、それぞれ一つの大きな私たちのふるさとなんですね。本当に貴重な映像を拝見させていただきました。

そんな中で、3人ともやはり「帰りたいという気持ちはずっと持っている。」というのを聞いて、皆、やはり同じなんだなと思いました。ただ、田中さんも、二点居住ということなんですけども、住んでいるのではなく、実際は富岡に通っている。住まいはいわき市。それから二俣さんも、子どもさんが受験期であるので、まだ本当に戻るかどうかは決めかねているという状況だと思います。大坊さんも帰ると決めていますけれども、来年の5月になってみないと分からない。なので、どちらかというと宙ぶらりんな状況に置かれていることだと思います。私も震災後は福島県内の体育館を3カ所、それから千葉でも2カ所ですね。今現在の横浜で8カ所目になりますが、行く先々で、なんか自分は地に足が付いていない、宙ぶらりんの状態で、だんだん月日が過ぎるごとに社会から取り残されているような感じになりました。先ほど田中さんが、女性は強いと言っていましたが、まあまあ私の場合は何とかどこの避難先でも適応ができるのですが、やはり男性は、特に浪江でバリバリ仕事をしていた方というのは、やはり避難先では居場所がないような状況で、大坊さんも言っていたように、浪江に帰りたいという気持ちは男性のほうが強く持っているのではないかなと思います。

本当に中途半端な生き方を私たちはしているわけなんですけれども、私はその都度、脳科学者の茂木健一郎さんの「自分なりのアプローチで答えを探し続けている…この宙ぶらりんの状態こそ、実はよく生きている状態に他ならない。」という、その言葉にすごく励まされて、宙ぶらりんでもいいんだ、地に

足が付いていなくてもいいんだ、今いるところで一生懸命生きればいいんだと考えるようになりました。これから先、再来年の3月で、長期帰還困難区域の人たちも含めて、全ての避難者は住宅の補助支援が打ち切られます。打ち切られた段階が、本当の被災者、避難者になると思います。

意向調査のアンケートによると、もう戻らないという方が半分ぐらい、わからないという人が30パーセント、アンケートにすら答えないとの方々もいます。浪江に行くたびにどんどん更地になって、もうさら地になった所は皆さん他の場所に定住してしまったんだなと、何となく寂しいような気持ちでいるんですけれども。

そういった中で、2、3質問をさせていただきたいと思いますが、私は浪江町に帰るたびに、生活感が全くない、不思議な空気感に襲われるんですけれども、皆さま方は、ふるさとに帰ったとき、昔ともちろん同じ町ではないんですけども、どのような感覚になりますでしょうか。何を感じて帰ってくるかということですね。実際に住んでいる人たちと、たまに戻るという人たちの感覚は違うと思うんですけども、帰ったときに何を感じて帰ってくるかというのをお聞きしたいのと、それから既にもう浪江に戻っている方が何人かいらっしゃいます。そういう方々とたまに話をするんですけども、ちょっと町に対する感じ方が違うなと思うんですね。イノシシが出たり、街灯がついていない、生活するにもスーパー・マーケットも病院もない、ここで生活が果たしてできるのかっていうことを言う自分は、まちの復興に足を引っ張ってるんじゃないかという感じで、「ここには住めないよ」っていうのが言えないんですね。私と同じように、復興に対して足を引っ張ってるんじゃないかという感覚をお持ちかをお聞きしたいと思います。

それから『すみれ会』で富岡町の人たちを集めて交流会を開いているということですが、今現在、福島第一原子力発電所には7000人とか8000人といわれている作業員の人たちが、それこそ北は北海道から西は沖縄のほうからも出稼ぎに来ているんですね。そういう方々…住む家、ふるさとを後にして、今現在、私たちの地域の復興に力を注いでくださっている方も二点居住かと思うんですけども、そういう作業員の人たちを交えての交流というのは富岡町ではあるんでしょうね。そういう「新しく富岡町に入ってきた人たち」が新たな富岡町をつくってくれるのではないかという、そういう作業員の人たちを含めた新しい居住者との交流というのはあるかどうか、それもお聞きしたいと思います。

川副 伊藤さん、ありがとうございました。続いて浦野先生からコメントをいただきたいと思います。浦野先生は早稲田大学の教授で、今回のシンポジウムの共催をしている地域社会と危機管理研究所の所長を務め、また、早稲田大学総合人文科学研究センター<現代社会の危機と共生社会創出に向けた研究>研究部門の代表をされています。では、コメントをお願いいたします。

浦野 司会の方で後ほど整理して、それぞれの方々に対する質問として投げかけていただくということにしたいと思いますが、私の方からは、まず問題意識と、それから具体的に問うていきたい内容をいくつか述べさせていただきます。

今回のシンポジウムを企画していく過程で考えた一番大きな論点は、日本の社会の歴史をみていたときに、當時一ヵ所だけに定住してそこで全ての生活のニーズを充足することは多分、極めて困難でありつづけたということを再確認し、そこからもう一度生活のニーズにどのように向き合い充足していくかを構想していくことだと思います。例えば、戦後の日本において大きな社会問題とされた出稼ぎの問題だとか、あるいは都市生活に必然的に付随してくる長距離通勤の問題だとかがあります。これまでの大都市での生活をみると、非常に長い通勤距離を経験しながら実際には生活をしている。先ほど、原発

作業員の方の話が伊藤さんから出されましたけれども、彼ら作業員の方々は恐らく比較的長期にわたって自分の家庭から離れて生活をし、そのようにして生計を立てて生活をしています。こうした生活は、日本社会のなかではそれほどイレギュラーな事柄ではなかったと思います。居住を含むすべての生活のニーズが、あるひとつの拠点において全て充足できるという環境条件は、恐らく日本の社会の中でも、割合と短期間の現象、しかもある限定された条件のもとで成立していた現象なのではないかと思います。そのように考えますと、現実には複数の拠点と関わりながら生活を組み立てていくような環境に置かれた人々は恐らくかなりいて、そうした環境のなかでどのように対応し、それをどのように生かしながら生き続けていくかが、今までの地域社会の経験の蓄積であったのだろうと思います。それが「良き生活か否か」という是非論はここではとりあえず留保しておきたいと思います。現実にそういう生活があり、そういう生活の中で対応していくという経験を我々は繰り返し行ってきた経緯が歴史的にもあるという点を前提として、ここでは考えていきたいと思います。

先ほど伊藤さんも、大坊さんの話を受けて、「生活機能の充足を考えると、これから仮に震災前の居住地に帰還したとしても生活を成り立たせるには困難な長いプロセスがあり、そこに至るまで中ぶらりんの状態がずっと続く。そして中ぶらりんの状態ゆえに、社会から取り残された感覚になる」といった趣旨の話をされていました。確かに生活機能の充足から考えると、そのような生活は非常に困難なものであり、また本人にとってはどうしたらよいかわからない暗中模索の状態が続くのだと思います。原発災害後の状況は、複数地域と否応もなく関わらざるをえず、それでも生活を営むなかで充足できないものがいろいろ溢れ出し、そうした不安に苛まれる、そういう状況なのだろうと思います。

さて、そうした<複数の拠点と関わりながら生きていく>という状況認識を念頭においたうえで、お三方には少し根源的な意味で、避難元の地域との関係をどう捉えているか、精神的な意味での拠点としてのふるさとは現在皆さんにとってどのような意味を持っているか、お聞きしたいと思います。それは例えば、ふるさとで自分にとって最も大事なものは何だと思うか。また広がりをもつエリアを考えたときに、どの地域までをふるさとというふうに考えられるか。別の問い合わせをすれば、自分たちの子どもに自分の考えているふるさとの何を知ってほしいか、ふるさとの良さとは何か。知っていてほしいものは、ふるさとの景観かもしれないし、いろんな思い出かもしれない。そうしたふるさとは、今、その地域から離れていて、失ったというふうに考えるのか、それは形を変えて今でもあるというふうに考えるのか、その辺をお聞きしたいと思いました。ちょっと哲学的にもなりますが、ふるさとで自分にとって最も大事なものは何だと思うか。それを失ったというふうに感じるのか。子どもに自分の考えているふるさとの良さを伝えるとすると何を伝えようとするか、というのが第一の問いです。

次にお聞きしたいのは、避難元の地域を介した人間関係の今後の姿に関してです。皆さんは、「東雲の会」だとか「すみれ会」だとか、そういう人間関係を避難先でもつくってこられているわけですけれど、その関わり方は今後どのようになっていくか、今後の状況の変化に応じて、組織自体は変わっていくでしょうが（例えば、「東雲の会」は、機能的な集団や物理的な仕組みとしては多分なくなっていく）、その人のつながりはどのように将来なっていくか、自分にとってどのようなものになっていくのが望ましいと思うか、といった問いです。「すみれ会」の場合には、先ほど仮に会員のひとりがもと居た富岡に戻って住宅を建てても、ぜひ「すみれ会」に残ってほしい、そうしたひととも一緒にいろんなことを話したりしたいという話をされていたと思いますが、その「すみれ会」っていうのは、将来にわたる人のつながり、関係性としてはどのようになっていくか、その関係性、そのつながりについては、将来どのようななかたちになっていくのが望ましいと思われるのか。そうした関係性は、ある意味ではふるさとの代替としての意味をもっているかも知れないのですが、その代替はどこまでふるさとの代替であり得る

のかという点を、お聞きできればと思います。

それから、さらにもっと遠くに離れている人との関係についてですが（例えば、双葉郡からかなり離れ、岡山だとか東京だとか沖縄だとかに居住していて、それなりにそこで定着し始めている人たちとの関係についてですが）、どういうふうなものが望ましいのか。普通に考えれば徐々に関係は切れていくということになるのだろうと思いますが、そうした人々とのつながりについてどういう形が望ましいというふうに皆さんは考えているのか。それに向けて、関係性を紡いでいくような試みは可能なのか、またこうした試みとしてどういうものがあり得るのか。そういう点に関してもお聞きできればと思います。



川副 ありがとうございます。今、お二人からいただいたコメントを確認させていただきます。まず伊藤さんからいただいた一つ目の質問は、帰宅するたびに何を感じて帰ってくるのかという質問です。二つ目は、帰宅した際にここで本当に生活できるのかという疑問を持つ自分がいるけれども、すでに帰還して住んでいる人と意識の違いを感じことがあるかという質問だったと思います。それから三つ目は、避難元では、今たくさんの作業員の方が廃炉作業に当たっており、そういう方々も二点居住をしている状態であるが、新しい町民という位置付けも可能になるのだろうか。そういう人たちとの交流やまちづくりの可能性はあるのかどうかという質問でした。

浦野先生から指摘された問題は、大きくはふるさととは何かという問題かなと思います。具体的には、ふるさとで最も大切なものは何なのか。それは失われたものなのか、あるいは形を変えて存在しているものなのか。子どもに何を伝えたいのか、ふるさとの何を知ってもらいたいと考えているかということです。二つ目は、避難元をベースにした自治会はふるさとの代替としても考えられるわけですが、どこまで代替になり得るのかという質問です。三つ目が、遠くに離れている避難者の方との関係はどういうものが望ましいのか、どんな試みが可能なのかという質問だったと思います。

併せて、フロアの方からいただいた質問もここで紹介させていただきます。まず、原発への思いですか再稼働に関する意見に関するご質問がありました。確かにこれはとても重要な問題で考えなければならない点ではありますけれども、今回はそこまで手を広げるということができません。今回は二点居住というところに焦点を当てて、避難者の方の生活について議論を進めたいと思うので、ご質問については別に考える機会を持たれればと思います。それから二点居住に関して質問があつたんですけども、一つは避難先の住民とのつながりはあるのですかというご質問がありました。先ほど二俣さんはママ友ができたという話がありましたが、大坊さんや田中さんはいかがでしょうか。それから三つ目の質問は、大坊さんにお聞きしたほうがいいと思いますが、浪江町の自転車屋さんの例で、事業再開し

ても続けることに課題があるというお話がありましたけれども、再開後、事業を続けていくために、今、不足していることは何だと思いますかという質問です。四つ目は、都内在住の双葉郡の出身者を中心とした交流会を主催しているが、なかなか参加者が集まらないが、どのようにしたら活性化できると思うかという質問がありました。『東雲の会』は退去に伴って今のかたちを維持することは難しくなるかと思いますが、そういった人たちを吸収する可能性もあるのかなとも思いましたが、そういった可能性はあるでしょうか。

もちろんどの質問にお答えいただいても結構ですが、一応どなたにどの質問をお答えいただきたいかをお伝えしておきたいと思います。伊藤さんから提起された、帰宅をするたびに何を感じて帰ってくるのかという点について、二俣さんにお話しいただければと思います。それから田中さんには、作業員の方を新しい町民として位置付けられるか、そういう考えが可能なのかということについてお答えいただければと思います。それから大坊さんには、浪江町に帰還して住んでいる人の意識の違いを感じことがあるかということについてお聞きしたいと思います。そして浦野先生から出された質問に関しては、3人の方、お答えできるところで結構なので、併せてご回答いただければと思います。

二俣 私は自分で運転をして、3時間ぐらいかけて行くんですが、福島県に入りましたっていうナビを聞くたびにホッとしながら帰っています。自宅を片付けながら、庭の手入れもしたりするのに最近は行っているんですけど、行くたびにだんだん家の傷みやカビが進んできているのでちょっと心配です。でも、土いじりとか、近所の人はもう住んでる方がいるので、早く帰ってこい、寂しいって言ってもらって、そういうふれあいがうれしくて今は行っています。

大坊 事業の再開っていうところまでは、いろんな国の制度とか面倒見がいいところがあるんですけれども、先ほど言ったように、開業した後の支援は、ほとんどないのが実情です。今、商工会を通して、例えば消費税の特区をつくってもらうことはできないかと働きかけています。やはり赤字の企業で一番きついのは消費税だと思います。あとは固定資産税の減免とか、さらに公共の上下水道の使用料とか、あと電気とかそういうものの基本的なインフラにかかる料金の減免があれば助かります。何とかできないかと、商工会には挙げてありますが回答はありません。

私はあまり、「東雲の会」の役員をやってて言うのははなはだ申し訳ないんですけど、群れるのは好きじゃないんです。本当に申し訳ないんですけど。気持ちが通じる人と交流を深めていくことが前提で今までやってきて、やはりそういうところから離れたときには、それはご破算になってしまって、それでまた必要な人とは本来つながるわけですから、そのつながっていった先でいろんな触手が伸びていって、また新たなつながりができるんじゃないのかなと思っています。

先ほど二俣さんが答えられなかった、田舎っていうもの。田舎ってやっぱり幻想の内にあるものなんだと思うんですよ。常に逃げ水なんだと思うんですよ。自分が思ってたものが見えるんだけども、追っかけていくと、遠くにまた行ってしまう。そういうものだと分かりながら、自分でイメージするところの田舎を追いかけて、いろいろな齟齬を感じながら生活をしてゆくのだろうと考えております。

川副 田中さんにお聞きしますが、避難先でのつながり、避難先の住民との交流はありますか。

田中 避難先の皆さんとのかかわり合いっていうことなんですが、私は一番先、いわきに戻ったときに考えたんですね、ただ黙っていては輪が広まらない。できるだけ地元の人たちのやっているものに参加

をしながら広げていきたいなというような感じで。最初にNPO法人さんからお話をありました。こういう会がありますから来てくださいって。必ず行きました。そこからまた次ということで、どんどん輪が広がっていきます。いわき市のみんなさんとか、NPO法人いわきおてんとSUN企業組合だとか、あといろいろな方々との付き合いが広くなりまして、それが『すみれ会』にも浸透してというような形で。その会で何かあれば私たちも行く。私たちのところで何かあれば来てもらう。そういうふうな感じで広めていきましたので、避難先の住民との自治会としてのトラブルは一切ございません。ただ、ここでイベントがあるよなんて言われたときには、私たちは田舎なので、すぐ、「田中さん、赤飯つくってくんねかな」なんて言われるんですね。そうすると赤飯を200とか300個つくってそれを持っていくて、その会のところで販売をして収益を上げてとか。そういう感じでしていますので、いわき市の皆さんとは、私たち『すみれ会』はうまくやっているのかなというような感じです。

川副 ありがとうございます。伊藤さんの質問についてはいかがですか。

田中 富岡町は結構双葉郡の中心地っていうようにいわれていましたので、出先機関の皆さんはたくさん戻ってきてくださると思うんですね。ただ、そういう方々も、富岡には住んでいないですね。仕事をして帰る。あと、作業員さんって男の方がほとんどだと思うんですね。私のお店にも来ていますが、ほとんど3ヵ月ぐらいするといなくなります。で、また新しい人たちが来るというような形で、常に人の出入りがあるので、そういう作業員さんとつながりを持つというのは、まだまだ大変なことなのかなっていうふうに思っております。どこから来ている方で、どういう人なのかっていうことすら分からないので、その作業員さんと仲良くなるというか、そういうのはあまりないですね。ただ、お店に来る人々はほとんどリピーターです。そういう方々とは、おはようとか、こんちわとか、あと、「俺は今度うちさ行くから」なんて帰っていってはお土産を持ってくれたりとか。そういうふうなお付き合いはありますが、自治会とか町の中の行事的な中の関わり合いは、まだまだ先のことになるのかなというふうに思います。

川副 ありがとうございます。大坊さんにお聞きします。少し話が戻りますが、浪江町に住んでいる方と通っている自分との間に意識の違いを感じることはありますか。もしあるとしたらどんなところに違いを感じますか。

大坊 帰郷はほとんど日帰りなんですね。そうすると、例えば町役場の人たちと、あとは商工会の関係者と、そんな方以外ではほとんど会話することはないわけですね。また町にお住まいになっている方は、ほとんど徒歩で外出したりっていうことはないので、まずお話をそのものができません。明日浪江に行くんだっていったときは、いわばちょっとピクニック気分のような、昔の遠足のような気分になります。行って、一通りのことをやって、そうすると大体2時間ぐらいかかるんですけど、それが終わると、早く帰りたいという気分になるんです。ここでお若い方、だいぶいらっしゃるんで、地方から出てきてる方がいらっしゃいます？　はい。その人たちって、恐らく初めのうちはホームシックにかかって、でもいつの間にか、逆に今度は田舎に行ったときに、東京のこっちの生活が懐かしくなって、必ずそういう転換点があると思うんです。自分も学生の時にそういう体験をしていて、今この生活をし始めてデジヤブみたいによみがえってきます。初めの頃は葛西の観覧車とかスカイツリーが見えて、あ、こういう別世界に来たんだなと思ったんですけど、今は逆に、葛西の観覧車の明かりが見えたりスカイツリーの

明かりが見えると、あ、帰ってきたなって感じがしてホッとする。非常に矛盾したような感覚になりますよね。話は戻りますけれども、やはり向こうに戻って生活をしてる人たちの本音本心っていうのは、なかなか計り知れないところはあります。

川副 ありがとうございます。二俣さんにお聞きしますが、遠くに離れていく人たちとはどのような関係を作ったらいよいと思いますか。息子さんがこれから進学されてしまうは東京が拠点になると思いまですが、そうしたふるさとではない場所に定着した人たちと、どのように関係を構築していったらよいのか、もしお考えがあればお聞かせいただけますか。

二俣 お母さん方の付き合いって、子どもたち小学校の頃は、結構、密にあるので、そこら辺でずっとこの8年間でも、東京に来るっていったら集まったり、結構LINEでつながってたり、お母さん同士では結構したりしてるので、他の所に行ったから離れちゃったわけではなくて、なんなら富岡町のとてもすてきな桜祭りとか、そういうときに集まろうかとか、そういうのはある。

松村 これは伊藤さんのコメントにあったので、大坊さんにお聞きいたします。大坊さんのうなぎ屋さんは震災前、浪江で知らない人はいないぐらいのお店だったんですが、大坊さんが帰還してまたうなぎ屋さんを始めるっていうことは、どういう周りの人にインパクトがあると思います？

大坊 周りの人のインパクトを考えるほどゆとりはまだなくて、逆に言えば自分のほうのインパクトっていうか、自分で、やるぞっていうような一つの踏切板は用意して、今まさにそこに向かって走っているっていう状況です。まだ本当に食えるかどうかも分からないんですけど、そんな形でまずスタートを切ろうとしているという状況で、それによってどんな影響を与えられるかっていう、そんな大層なことは全くなくて、できれば比較的長く、皆さんにまた利用していただけるようになればいいなとは思っています。

松村 意識はされなくても、大坊さんが戻られたことで、そういうプラスの効果があるとすれば、それはいいことだなっていうふうには思っていらっしゃるっていうことですよね。

大坊 前にも申したとおり、私が戻っていい影響があるのか、それともそのように商売を始める人が出てきたのだから、いつまでも避難生活が大変だとか愚痴をこぼすことが戒められるのか、そういうようなことになれば非常に私は心外なことだと思います。自分の個人的な考え方やるだけの話で、さっき言ったような、本当に微々たる憩いの場とか、昔の思い出っていう何か一つ町に戻るのかというぐらいの印象でしかないっていうのが、実際のところ自分の気持ちなんんですけど。それによっていろんな判断をされるっていうのは、ちょっと怖いところがあります。

松村 それではコメンテーターの方から登壇の方に何か追加ありますか。

伊藤 登壇の方へというよりも、先ほどの浦野先生の、「ふるさとというのは何なのか、大事なものっていうのは何だろうか」というのを、3人の方のお話を聞いて、以前私は一番ふるさとにとって大事なものはコミュニティではないか、今まで住んでいた人がいなくなったふるさとは、ふるさとではない

んではないかと強く思っていましたが、だんだん考えが変わりまして、やはり先ほどの映像の中のとても素晴らしい自然の風景であったり、伝統文化であったり、そういったものは本当に数年間で築き上げるものではないと思うんですね。本当に昔からの大切なものが失われてしまいました。今、私は浪江から出て横浜にいますが、8年間築きあげてきたもの、これも本当に大事な私のコミュニティーなんですね。そこで知り合った方々は、やはりもう別れづらくなりましたし、どんな場所においても浪江の人たちとはいいろいろなツールを通じて連絡を取り合うこともできるので、コミュニティーが一番ふるさとの重要なものかというと、そうではなく、浪江町、富岡町、それぞれの情景、風景、自然、それから伝統文化、そういったものが事故によって失われてしまったというのが、それが一番避難している者にとっては悔しいというか…。大坊さんではないですけれども、誰かが礎になって、また町を再開して、伝統文化、豊かな自然を取り戻していただきたいと思っております。

大坊 私は礎になろうとは思っていない。別に私はフロンティアになろうとしては何もしていないので。ただ自分でできることっていうのはそんなものだろうと。やっぱり決して無理はできないし、さらに自己犠牲を強いて町に帰ろう、みたいなことで旗を振ろうとかいうようなことは全くない。そのところだけは知っていただきたい。今お話をあったので。

川副 コメントに対してご返答いただきありがとうございました。前半の座談会でお聞きできなかつたことも詳しくお話しいただけたかと思います。最後に、浦野先生から、閉会のあいさつと併せてコメントをいただければと思います。

浦野 双葉郡ないしは浜通りエリアでの生活を考えると、今後の生活の仕組みとしては（とくに生活を支える機能の配置という側面からみれば）、恐らく浜通りを一帯として捉えた広い範域のなかで何とか生活を成り立たせていくというトレンドに、どうしてもなっていくと思われます。一方で、先ほどの質問群のなかで聞きたかったことのひとつは、ふるさととはどの程度の広がりをもつエリアとして考えられるのだろうかという点です。自分でかつて実際に生活していた空間は比較的狭いエリアだと思いますが、例えば、夜ノ森地区であれば、夜ノ森の桜とそれにまつわるさまざまな事柄が、景観とか風景だと伝統というものとしてふるさとの最後のエキスとして残るということなのか。あるいは、双葉郡全体の中で、もう少しいろいろな地域が自分の中で混ざり合いながら、それぞれの地域の良さを融合したかたちでふるさとという漠然とした形を取っていく段階に将来徐々に入っていくというふうに考えられるのか。その辺は最後一言だけ聞きたかったなという感じはしております。



さて、最後に、今回のシンポジウムに参加した感想ですが、恐らくここの会場におられる方々にとっては、必ずしもすっきりとした感じで終わるシンポジウムではないという実感を持たれていると思います。私もそう思います。でも実をいうと、このすっきりしない状態というのが、今の被災地、それから被災地から避難している人たち、それから今いろんなところで定住し始めている人びとにとては、現在のリアルな実感なのだろうと思っています。そして、このモヤモヤ感を残したまま、どういうふうな形でこれから生きていこうかということを人びとは模索しているように思います。このモヤモヤ感は、人々の中にずっとあり続ける。恐らく大事なのは、このモヤモヤ感を忘れない、別の言葉でいえばある一つの尺度だけで物事を全部分かったと思わないことなのだと思います。いろいろな状況、いろんなポジションや立場があって、そしてそれぞれの立場の方々は、今までそういう思いで自分のモヤモヤ感を

溜め込んで生きてきた。恐らくそのモヤモヤ感を抱きながら、ある時は対立することもあるし、お互に葛藤することもあるし、自分の中でも模索し葛藤する要素をずっと抱えてきているということなのだと思います。恐らく『わたしたちはフクシマを忘れない』というメッセージは、そういう体験、あるいはそうしたモヤモヤ感をどういうふうに共有していくのかということかなと思っております。

ということで、今日はそういう趣旨のシンポジウムなので、恐らくすっきりしない感覚を残しながら皆さん帰っていかれるのだと思いますけれども、それを来年までまた引きずっていただいて、来年もこのようなシンポジウムに来ていただければと思います。どうも長時間シンポジウムに参加していただきありがとうございます。

これをもって閉会のあいさつにさせていただきます。

(了)